

## 第四章 ギルドホール

ウェエストミンスター宮殿からテムズ川へは長い階段がありました。

階段の両側には兵士が立っていました。

ロンドンの人々は川のそばで王室の（儀式用の）船を見ていました。

トムが出てくると、群衆は「エドワード王子万歳」と叫びました。

トムは重要なうたげのために、美しい白い服と宝石を身に着けていました。

トムは川を見て、友達や遊びのことを思いました。

トムが王室の船へと階段を下りて行くと、貴族たちはお辞儀をしました。

船がギルドホールへ向かってゆっくりと川を下る間、トムは船の前部に立ちました。

トムにとって何もかもが初めてだったので、彼はわくわくしていました。

ギルドホールは川のそばにある大きな建物で、そこではロンドンの裕福で重要な者たちが皆、王子を待っていました。

同じ頃、ジョン・キャンティはエドワードを連れ、彼を引っ張ってプディングレーンに行きました。

人々は笑い、彼らの後をついて行きました。

「その子を懲らしめてやんな！」と若い女が怒鳴りました。

彼らがジョン・キャンティの家のそばに来ると、アンドリュー神父が彼らの前に立ちました。

「彼を傷つけてはならん！ 放してやりなさい！」とアンドリュー神父は言いました。

ジョン・キャンティは腹を立て、神父に応じませんでした。

彼はアンドリュー神父の頭を棒で殴り、神父は地面に倒れ込みました。

ジョン・キャンティはエドワードを家に引っ張って行きました。

ジョン・キャンティは自分の小さな部屋のドアを開け、「お前のかわいい息子はここだ。こいつは俺たちのために1ペニーだって持ちっやいなえ、それに狂っちまってもいるんだ」と妻に言いました。

トムの母親はエドワードのところへ走って行き、「ああ、私のかわいそうな子よ」と言いました。

「金もねえ。食う物もねえ」とジョン・キャンティはエドワードに言うと、彼を床に押しつけました。

トムの父親は残酷な男でした。

ドアの外で声がしました。

「ジョン・キャンティ。早くしろ。ドアを開けるんだ」

「何だよ？」とキャンティは言いました。

「お前がアンドリュー神父の頭を殴っただろ、それで神父は死んじまったんだよ」と若い男が言いました。

「死んだだと？」とジョン・キャンティは尋ねました。

「こいつはまずい。俺がああのじいさんを殴ったとき、大勢の人が俺を見た」

ジョン・キャンティは妻の方を向き、「急げ。娘たちを連れてロンドンブリッジで俺と落ち合うんだ。俺は息子と別の道に行く」と言いました。

キャンティはエドワードの腕をつかむと、エドワードを引っ張って小さくて暗い道を抜け、川までやってきました。

そこでキャンティは人の群れを見ました。

テーブルで腰掛けて飲んでいる者もいました。

「こりゃあ一体何だ？」とキャンティは一人の男に尋ねました。

「お前ら何を待ってるんだ？」

「知らないのか？」とその男は言いました。

「俺たちは王室の船に乗ったエドワード王子を見るために待ってるんだよ。王子はギルドホールでのうたげに行くのさ。ほら、飲みな」

彼はジョン・キャンティに大きなカップを渡しました。

キャンティはカップを取るために、エドワードの腕から自分の手を外しました。

エドワードは素早く男たちの脚の間を抜けて逃げました。

キャンティは下を見ました。

「息子はどこだ？ やつを止めろ！ 捕まえるんだ！」

エドワードは逃げながら、「私はギルドホールに行き、トムを見つけねばならぬ。そうしたら私たちはまた服を取り換えることができる」と思いました。

トムがギルドホールの中へ入ると、皆が立ち上がり、お辞儀をしました。

トムは王子の姉たち、そしてレディー・ジェーンと共に高いテーブルに着きました。

何百人もの召使いたちがあらゆる種類の食べ物を運んできました。

たくさんの肉、魚やチーズ、そしてさまざまなケーキがありました。

程なくしてうたげが始まりました。

皆が話し、笑いました、そして歌手やダンサーもいました。

トムは目にするもの全てに驚き、王室のうたげを楽しみ始めました。

エドワードはやっとギルドホールに到着しましたが、彼は疲れ果て、汚れていました。

エドワードは兵隊の中の一人のところへ行き、「私はエドワード王子だ！ ドアを開けよ！ 私は中へ入りたいのだ」と叫びました。

兵士は彼のことを笑いました。

「私はお前にドアを開けるよう命ずる！」とエドワードは叫びました。

「ふざけるな！」と兵士は言いました。

「下がれ」

群衆の人々は怒っていました。

「この少年を追っ払え」と彼らは怒鳴りました。

「こいつは気が狂っている。俺たちはうたげが終わったときに王子を見たいんだ。消えうせろ」

「私は行かぬ。私がエドワード王子だ。あそこにいる少年はこじきだ。私がヘンリー王の息子なのだ」

群衆は危険な様子になってきましたが、エドワードは動きませんでした。

すると、背の高い黒髪の男が怒った群衆の中から出てきて、エドワードの横に立ちました。

「おそらく君は王子なのかもしれんし、おそらくはそうでないのかもしれん」とその男は言いました。

「しかし君は勇気ある少年で私は気に入ったぞ、従って君を助けるとしよう」

「そなたは何者だ？」とエドワードは尋ねました。

「私の名はマイルズ・ヘンドン、イングランド王の兵士だ。昨日フランスから戻り、そして田舎の私の家へ向かうところなのだ」

危険な群衆はさらに近づいて来ました。

「下がれ！」とマイルズは群衆に向かって叫びました。

マイルズは剣を取り出し掲げました。

「やつらを殺せ！」と群衆の後ろの方から誰かが叫びました。

人々は彼らに向かって物を投げ始めました。

マイルズはエドワードの前に立ち、彼を守りました。

群衆は大きく、そして怒っており、マイルズはたった一人でした。

すると突然、皆が怒鳴ったり争ったりするのを止めました。

彼らは馬の音を聞きました、すると一人の兵士が「下がれ！ 王様の第一卿がやって来るぞ」と叫びました。

兵隊は群衆を押し分けました。

ハートフォード卿が階段をかけ上がり、ギルドホールの中へ入って行きました。

彼はトムのところへ行き、「殿下、お悔やみ申し上げます。お父上がお亡くなりになりました」と言いました。

そしてハートフォード卿は人々を見て叫びました、「ヘンリー王ご逝去！ エドワード王万歳！」

うたげにいる皆が、「エドワード王万歳！」と叫びました。

マイルズ・ヘンドン素早くエドワードの腕をつかみ、二人は逃げて行きました。